

地域インフラをテーマとしたコンテンツ開発

株式会社新潟博報堂

当たり前すぎる存在となっている地域インフラの成り立ちの歴史や重要な役割を再認識してもらうための新たなコンテンツ開発に挑戦したい。

今回テーマに取り上げたいのは、信濃川と新潟県人の闘いの歴史。まずは「興味をもってもらう」ために、若い人やメディア、SNS で興味喚起するためのオリジナルの「物語」を開発する。開発した「物語」を核とし、将来的にはインフラツーリズム（=聖地巡礼）まで発展することを目指したい。

2020年度は、作家とテレビ番組プロデューサーを招聘し、信濃川大河津分水路とその流域に生まれた産業を視察してもらうことで今後の情報発信の可能性を検討する。

信濃川大河津分水路通水 100 年となる 2022 年に向けて広く仕掛けていきたい。

1. 専門家

浅生 鴨（あそう・かも）

1971 年、兵庫県生まれ。作家、広告プランナー。ゲーム、レコード、デザイン、広告などさまざまな業界・職種を経て、

NHK に入局。「週刊こどもニュース」などのディレクターを担当したのち、2009 年に開設した広報局ツイッター「@NHK_PR」が、公式アカウントらしからぬ「ユルい」ツイートで人気を呼び、中の人 1 号として大きな話題になる。

2013 年に文芸誌「群像」で発表した初の短編小説「エビくん」は注目を集め、日本文藝家協会編『文学 2014』に収録された。

2014 年に NHK を退職し、現在は執筆活動を中心に広告やテレビ番組の企画・制

作・演出などを手がけている。

河瀬 大作（かわせ・だいさく）

（株）NHK エンタープライズプロデューサー。1969 年、愛知県生まれ。93 年、名古屋大学大学院文学研究科修了後、NHK 入局、ディレクターとして『プロフェッショナル仕事の流儀』『NHK スペシャル』『クローズアップ現代』などを制作。プロデューサーとして『探検バクモン』『おやすみ日本 眠いいね!』『はに丸ジャーナル』『アナザーストーリーズ 運命の分岐点』『世界入りにくい居酒屋』『あさいち』『有吉のお金発見 突撃!カネオくん』などを手掛けてきた。

「NHK×日テレ 60 番勝負」2013 年ソーシャルテレビ・アワード大賞／「ラストデイズ 忌野清志郎×太田光」ギャラクシー賞

奨励賞ほか

山田 立 (やまだ・りつ)

工場の祭典の主要メンバーであり、燕三条を代表する企業（玉川堂、諏訪田製作所、タダフサ、マグネット）が、地域の情報発信とランドオペレーターの役割と地域のさらなる活性化を目指すために立ち上げた、（株）つくるの代表。

ものづくりから地域の歴史や文化まで、来訪者のニーズに合わせ幅広い対応を目指している。

地域限定旅行業免許（4-433）資格を有する。

樋口 勲 (ひぐち・いさお)

平成 26 年 11 月に Love River Net を 立ち上げ。信濃川大河津資料館勤務時代に川の素晴らしさに気づかされる。

以後、任意団体 Love River Net の活動等を通じて、水辺の生きもの観察会や川下り、川でものづくり、水辺コンサートなど、水辺イベントを多数企画。川巡りツアー、川の講演会、防災講座など講師多数。好きな言葉は「万象に天意を覚る者は幸いなり」。

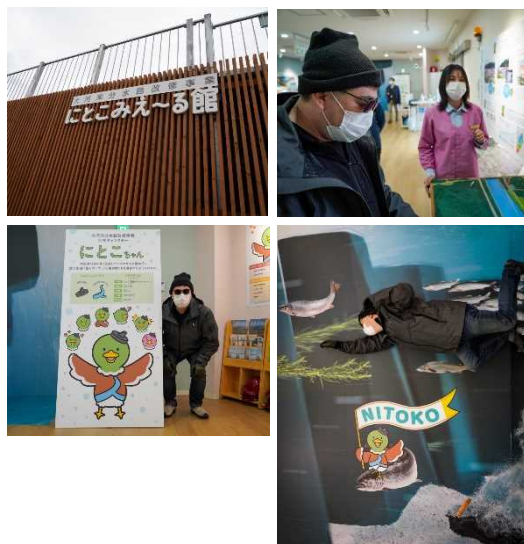
2.視察

視察 1 日目：2020 年 11 月 28 日（土）

●信濃川大河津資料館（新潟県燕市）



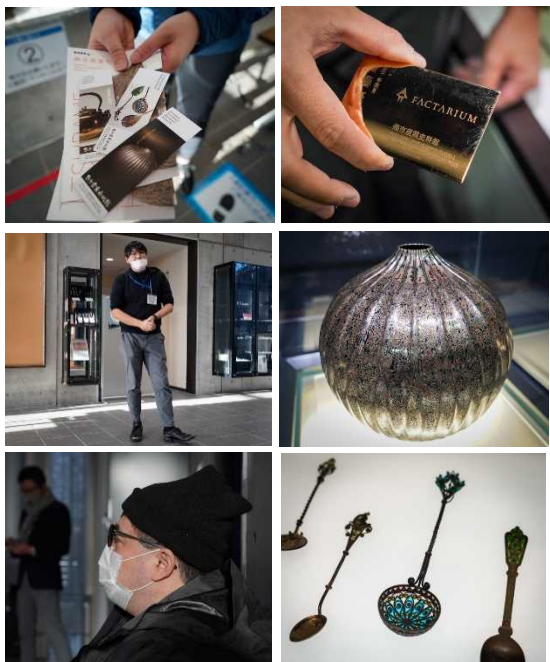
●にとこみえ〜る館（新潟県長岡市）



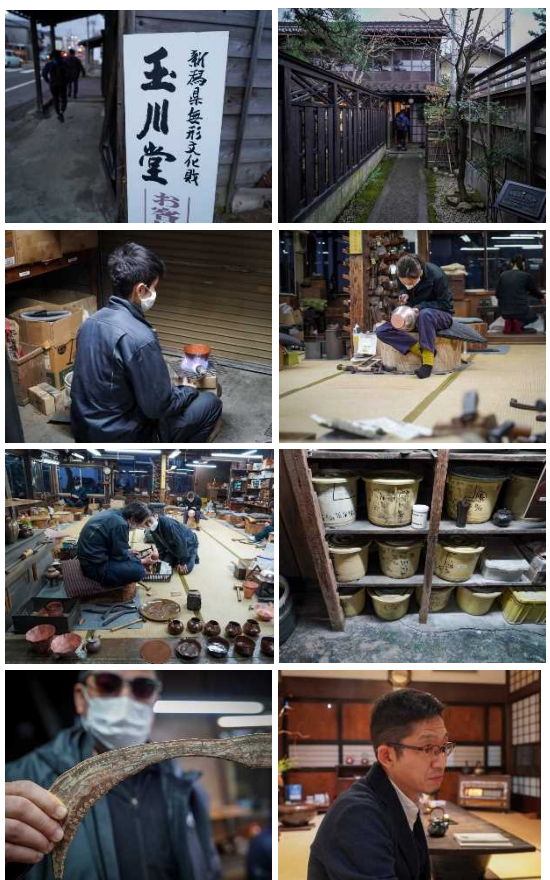
●MAGNET（新潟県燕市）



●燕市産業資料館（新潟県燕市）



●玉川堂（新潟県燕市）



視察 2 日目：2020 年 11 月 29 日（日）

●燕三条地場産振興センター（新潟県三条市）



●弥彦神社（新潟県弥彦村）



●弥彦山ロープウェイ





●新潟ワインコースト



3.物語の目的と要素

●物語の目的

信濃川という「暴れ龍」と、人間との「闘い」の物語

かつて地域伝承の「民話」として語り継がれてきた土地に根ざした民族の物語は、出版物やラジオ、テレビの普及で口承の表舞台からは消え、代わって出現した映画やマンガなどの「創作物語」が、今はその代替機能を担います。

「帝都物語」が関東の地下に眠る「地震の力」を、代々生まれ変わる「平将門の怨霊」として物語にし大ヒットしました。同様に我々も、信濃川が秘めた強暴な力を「暴れ龍」として描き、その「龍と人」との「闘いと共存」の物語を描きます。

遠野物語	柳田国男	帝都物語	荒俣宏	ゴジラ	たろう	たつこのこ	の神隠し	千と千尋
------	------	------	-----	-----	-----	-------	------	------

図1 川や龍をテーマにした民話や創作物語

東北地方・岩手県に伝わる民話を柳田国男は集め「遠野物語」として編纂。そこには河童はじめ多数の妖怪が登場。1954年に日本初の怪獣映画として封切られた「ゴジラ」は、台風のアナロジーを水爆実験と結びつけ大ヒット。また、荒俣宏は近代史やオカルト史の研究が高じて、東京とその地下のエネルギーを主人公に「帝都物語」を創作。小説・映画・マンガなどマルチ展開で大ヒット作となった。

松谷みよ子は長野県・信州や新潟県の民話を採集し、その成果として「龍の子太郎」を著した。宮崎駿は「千と千尋の神隠し」で、副主人公のハクを主人公・千尋を守る「川の化身の龍」として活躍させ、日本映画史上ナンバーワンの大ヒットを記録した。

●物語の主な登場人物（自然界）

信濃川の化身たる「龍神」と、その娘「洞子」が物語の影の主役

もともと水神様である「龍」、信濃川流域には龍神や大蛇にまつわる伝承がいくつも残されています。松谷みよ子の『龍の子太郎』の元になった民話も越後新潟で採取されたものです。この伝統にならい、主人公をまるでスターウォーズの「ダースベーダー」のような強力な悪の主人公として設定します。物語はこの龍が「長き封印」から解かれるところから始まります。

自然界の伝令としての「河童」が、物語の進行役

また、スターウォーズにおける「R2-D2」のような物語の進行役として、自然界からのメッセンジャーでもあり、人間に

少し味方する「河童」を設定。大事な予知を伝えたり、物語の続きへとつなぐ「龍は、まだ生きている」など、物語の鍵を伝えます。



河童

良寛和尚が桑原家に書き遺した「水神相伝」に御先祖様のことが載っているのが誇りの由緒正しい長岡の河童。自然界の中ではやや人間寄りの感情を持ち、人間達に少し味方する。

図2 「越之風車」(新潟県立歴史博物館蔵)より

龍の娘 洞子

長きに渡り村の鎮守に封印されてきた龍神は、娘の洞子と再会(合体)することで大自然の魔力を甦らせる。その圧倒的な力を弱めるには、二人を引き裂き、分かたしない。



龍神

図3 長岡市蓬平「高龍神社」御朱印帖の表紙の龍より

●物語の主な登場人物 (人間界)

「龍神」に翻弄されながらも立ち向かう、「若者たち」に観客は共感する

男子2人+女子1人という鉄板の3人組を軸に、危機また危機の波瀾万丈の冒険物語が展開します。読者や視聴者は、この3人のコトのなりゆきに自己投影し、ハラハラ・ドキドキしながら、治水の大切さを深

く実感してゆく構成です。

葛目 正流 (かつめ・まさる)

東京から転校してきた高校2年生。ひよんなことから龍を復活させてしまう。

美月 梨花 (みづき・りか)

正流の同級生。幼いころから日舞を習っている。

永岡 巧水 (ながおか・たくみ)

梨花の幼なじみ。剣道部。神主の息子。実家は歴史ある梳勢神社。

4.物語のあらすじ「臥水之龍」(仮)

物語のあらすじ (1) 橋の親子

1922年(大正11年)8月。東京から親戚を訪ねてきた高校生、葛目正流はある朝、橋を渡れずに困っていた少女、洞子に出会った。

洞子を助けて父親に引き合わせた正流。そのことを知り合ったばかりの友人、永岡巧水に話すと、巧水は眉をひそめた。

小さな集落だが、そんな親子を見たことはないと言う。話を聞いていた巧水の父が怪訝な顔つきになる。

かつてこの世界は龍が支配していた。龍は水の力で人を痛めつけ、自分たちの仲間が棲みやすくなるよう、世界を水に沈めようと考えていたのだ。あるとき、龍に戦いを挑んだ若者たちがいた。そしてついに龍を封じ込めたのだ。心臓に最も近い場所の鱗を剥がし、その力を押さえ込んだ。

龍には穴が空き、力を込めようとしても、抜けてしまう。剥がした鱗はその後ど

こへ隠されたのかは誰にもわからない。

小さな龍に変化したという言い伝えもある。

いずれにしても龍にその鱗を手に入れさせてはならないとだけは、固く戒められている。

「今はもう科学の時代なんだ。西洋を見てごらん。科学こそが文明を発展させるんだ。土着神話なんて信じる君たちのほうがおかしいよ」だが、確かに少女にはどこか古めかしいところがあったように思う。

青い着物の柄も、髪飾りも、今風ではなかった。

「だが、祭があるから大丈夫だろう」巧水の父は自分を納得させるように頷いた。

物語のあらすじ (2) 暴れ龍の覚醒

まもなく年に一度の神の怒りを静める祭が梳勢神社で開かれる。巧水の幼なじみ、梨花はその薪能舞台で舞を舞う予定になっていた。巫女の血を引く梨花の舞が神を鎮めるのだ。だが、夕方から降り出した雨はやむ気配がないどころか、ますます激しくなっていく。このままでは祭が開けず、神を鎮められない。

高台から眺めた河の水かきはどんどん増している。今にもあふれ出そうな勢いだ。やっぱりあの伝説は本当だったんじゃないか。少女を見つけ出して、橋のこちら側に戻さなきゃいけないんじゃないだろうか。

やがて厚い雲で覆われた暗い空に二つの目が光った。一人の老人が叫ぶ。

「あれは龍神の目だ」「なぜ復活したのだ」

「このときを待っていた。人間どもよ。よくもこれほど長きに渡って我が体を封じて

くれたものだ。今こそその恨みを晴らそうぞ」

その声に聞き覚えのある正流。「あのときの父親の声じゃないか」

「そのとおり、お前のおかげで復活できた。お前には礼を言っておこう」

長年、この集落が鎮めてきた龍がついに復活した。龍神は仲間の風神や雷神を呼び寄せ、一気に世界を自分たちのものに変えようとする。次々に起こる自然災害に戸惑う人々。

「僕が復活させてしまったのか」正流は巧水と、巧水の幼なじみ、巫女の血筋を引く梨花とともに龍神を鎮めることを決意する。

物語のあらすじ (3) 龍を封じる法

巧水の家は旧家で、曾祖父の代までは神主だったらしい。祖父が子供のころに廃業して神社では亡くなったが、まだ奥の院には古文書が大量に残されている。龍を封じ込める方法を調べるため巧水の家に集まる三人。祖父が社の奥から持ち出してきたのは一巻きの古文書だった。

「龍を封じ込める方法だ」

古文書を読み解き、針孔錐剣が必要だとわかるが、その剣がどこにあるのか。

「その剣はどこにあるの?」「ここに書かれている」祖父が指し示す先は一枚の絵。

「それじゃわからないよ」

突然、屋根が吹き飛んだ。強烈な風が吹いている。

穴の空いた屋根の隙間から正流は空を見上げる。祖父は意識を失っている。

このままではダメだ。急いで剣を見つけなければ。

三人は知識人の高橋健三、田沢実入、大竹寛一（あるいは青山士、宮本武之輔）に相談する。

「この文書によると、この絵を読み解くための歌があるようだね」

「どんな歌でしょうか？」

「それは私にもわからないよ」。

物語のあらすじ (4) 河童のお告げ

ふと、梨花の頭に子供のころに無理やり習わされた地元の踊りがよぎる。あの踊りに使われている歌の出だしが巻物に描かれた様子とそっくりなのだ。

「ねえ、もしかしたら、その歌、私知ってるかも」

古文書と歌を手がかりに、針孔錐剣が納められているという社へ向かう三人。だが最後のパズルが解けない。そこへ、突然木の上から声が聞こえてきた。

「へへ。お前らには見つけられないさ。無理なんだよね」

ふっと木を見上げる梨花と巧水。カッパだ。

「何が無理なんだ」

「お、お前ら、おいらが見えるのか!？」

龍が復活したことで、あらゆる場所で超自然的な力が強まっている。祖先から伝わっていた二人の力も同様に強まっていたのだ。

かつての沼垂と同様、毎年のように位置が変わる社は、人の目には見つけることが出来ないのだ。

物語のあらすじ (5) 水切りの剣

カッパの力を借りて針孔錐剣を手に入れる三人。剣を手にも龍と対峙する三人。龍は

完全に力を取り戻しつつあった。

「この地は我がもの。我々龍族のもの。人間が水を抜き、渦を干上がらせるたび、我々は棲み家を追われてきたのだ。居場所を失う者の苦しみと悲しみを思い知るがいい」

「そのために人間が死んでも平気なのか」
龍に問いかける正流。

「平気なのかだと？ 聞くまでもないわ」

龍が大きく咆哮を上げると、空に様々な神が集結し始めた。風、雷、雨、炎。あらゆる自然の神々が集まり、それぞれの力を龍のために使おうとしている。

「このままじゃ、世界中がメチャクチャになってしまう」

だがいくら剣を振るっても龍に傷をつけることさえ出来ず、龍から鱗を剥がそうとするが上手くいかない。

「みづきり……まさか」

針孔錐剣は水切りの剣なのかもしれない。

「私がやってみる」

河に剣を突き立てる梨花。剣を使えるのは梨花だけだったのだ。だが、河の流れが速すぎて剣を取られそうになる。

「もうダメ、力が……」

「おいらに任せろ」濁流に飛び込んだのはカッパだ。剣を抱えるようにして水流から守るカッパ。

暴れる龍。他の神々も総力を挙げて、剣を抜こうとする。

ダメだ。俺たちだけじゃ。

物語のあらすじ (6) 暴れ龍を割く

そこに遠くから響く機械音が聞こえてくる。

「私たちに任せなさい」

高橋たちが、重機を使って土砂を投げ入れ、水の流れを一瞬押さえ込んだのだ。

「今だ」

剣に力を込める梨花。突き立てた剣を境に河が二つに割れていく。次第に、もだえ苦しみ始める龍。河が分かれるのと同時に、龍の体の一部が剥がれていく。落ちた鱗が小さな龍となって暴れ、やがて横たわった。

龍神は力を失い、川の底へゆっくりと戻っていく。小さな龍が溶けていく。そして新たな河となった。

1922年（大正11年）8月25日のことである。

「それじゃあ、ひいお婆ちゃんはその剣を使って河をわけたの？」祖母にそう聞いたのは美月芳子。

「そうよ。まだ私も生まれる前の話」

「今、その剣はどこにあるの」

「あなたの目の前にあるわよ」

芳子の目の前に広がるのは、大河津分水。

5.コンテンツ開発に向けた今後の取組み

●専門家による感想

今回招聘した東京在住の作家とテレビ番組プロデューサの感想は「地域の人々の説明がなによりエネルギーで、また会いに来たいと思わせる」ものだった。招聘者との会話の中から興味を探りそれに応え、視察先もそこから決めていくというまさにプロがなせるテイラーメイド型の視察となった。

●大河津分水路をテーマとしたツアーコンセプト

「潟」の文字が示す通り、かつて新潟は稲作には適さない巨大な湿地帯であった。信濃川は氾濫を繰り返し、人々は水と闘い続けてきた。大河津分水路事業や新田開発など地道な努力が、新潟を日本一の米どころとして躍進させ、また米だけに頼らない産業としてモノづくりが発展していった。信濃川大河津分水路をきっかけとして、歴史や自然、ものづくり、食などさまざまなテーマでツアー開発が期待できる。

特に、ものづくり（クラフト）をテーマとした外国人向けツアーの造成は、（株）つくると共同しモニターツアーを実施しながら商品化を検討していく。

●きっかけをつくる「物語」

講談社「ラノベ文庫」、小学館「歴史・時代小説」の各編集者に、作家経由で大河津分水路と土木技術者の資料を持ち込んでいる。「物語」ができたところから、コンテンツの横展開をしかけ、話題化を図っていく。